

# 矢巾町「カヌー史」をひも解く



煙山ダムで行われた国体カヌー競技に臨む選手ら

## 全ての始まり

### 岩手国体

昭和45（1970）年、岩手県で初めて開催された国体（第25回国民体育大会夏季大会）で、本町がカヌー競技の会場となったことを知っていますか。

当時のカヌー競技は、順位決定に影響しない競技として、同年9月7、8の両日に行われました。21都道府県から選手118人、県勢は本町選手14人が出場したことや競技当日には観客など、総勢約8千人が訪れ、会場を埋め尽くしたことが、当時の資料に記されています。

東京オリンピックが行われる令和2（2020）年は、本町で国体カヌー競技が行われてから、ちょうど半世紀・50年の大きな節目となります。これに合わせるかのようには、本町出身選手がオリンピック・カヌー競技への出場を決めました。

水本さんの快挙をひも解くと、矢巾の地に長年にわたり受け継がれてきた、カヌーへの情熱が見えてきました。

## 町を挙げた

### 体制整備

本町が国体カヌー競技の会場に決定したのは、国体開催のわずか5カ月前の昭和45年4月でした。そのため、町や町体育協会、婦人会など、関係団体が連携し、急ピッチで準備が進んでいきました。競技会場の設営準備はもちろん、地元出場選手の育成も必要でした。

同年5月3日～5日の3日間、カヌー競技の普及や選手育成のため、当時のオリンピック候補選手9人が会場を訪れ、公開練習を実施。国体に出場する選手が、本番に向けて実力者の手ほどきを受けました。

また、開催するうえで大きな課題となった宿泊先の選定。町では煙山ダムに近い南昌や広宮沢など6地区の約50軒に、民泊を依頼。各家庭では、選手との貴重な交流の場が持たれました。

他市町村とは比較にならないほど、短期間での大会準備となりましたが、関係者の努力によりカヌー競技は成功裏に終わりました。

## 郷土に息づく

### 情熱

岩手県で初となった国体開催。町では、カヌー競技の成功に向けて、町民が一丸となって取り組みました。これが、町内にカヌーというスポーツが根付くきっかけとなり、県カヌー協会の事務局が本町に置かれるなど、その歴史は現在まで続きます。

昭和63年には、県立不来方高校が開校。同校のカヌー部では、水本さんを筆頭として、町内から進学した生徒を含め、多くの選手が全国の舞台で活躍してきました。カヌーは町を代表するスポーツといえるでしょう。

昭和中期、カヌーは国体の正式競技ではなく、全国的にまだ普及していないスポーツでした。

町が築き上げた国体での実績は、カヌー文化を町内に根付かせ、町民の自信、誇りとなりました。そして、町のカヌーの歴史は、水本さんの東京オリンピック出場へとつながっていきます。



△激戦する一般カナディアンカヌー500メートル競争



△慎重に計時する計時員



△表彰状を受ける入賞者選手



△選手を見送る町職員



△民泊家庭で食事をする選手

【写真解説】

1. 昭和45年9月7、8日に行われた岩手国体カヌー競技。一般男子・女子、高校男子・女子でそれぞれカヤック、カナディアンの計12種目が行われました。
2. タイムを図る計時員。運営スタッフらは、大会まで時間がない中で、必死に競技ルールを学び、大会に臨みました。
3. 表彰式に臨む選手ら。
4. 矢幅駅前で見送る、当時の町職員ら。
5. 民泊を受け入れた家庭での、家族と選手の団らんの様子。
6. 最初の岩手国体でカヌー競技が行われた煙山ダム。黒線部分がレースコースとなりました。

6

